

私は自分で言うのもなんだけど、人のために尽くしたり、働くことが大好きな中学生です。友だちが何か悩んでいたなら「どうしたの？」と相談に乗り、学級で大変な仕事や役割が決まらず困っているときは、「私がやります。」と立候補します。周囲の友だちは、「いいこぶりっ子」と思っている人もいますが、私は気にしません。というのも、相談に乗った友だちから「彩香がいてくれてよかった。」とか、担任の先生や友だちに「みんなが嫌がっている仕事を引き受けてくれてありがとう。」などと言われたときには、心が充実し満ち足りた気分になるからです。

そんな私の生き方は、母の教えに影響されています。母は口を開けば「人様のために尽くしなさい。」とか「世の中で最も尊いものは人に対する『優しさ』だ。」と言います。事実、母は絵に描いたようにその言葉を実行しており、母の周囲には笑顔と感謝の心が絶えません。母は看護師の仕事をするかたわら、地域のボランティア活動にも積極的に参加しています。人の命を預かる看護師の仕事だけでも肉体的にきついはずなのに、時間を見つけてはボランティア活動する母は、私の一番尊敬する人間です。いつか、母のように、誰に対しても分け隔て無く「優しさ」の心を持って人に接することのできる人間になりたいと考えています。

先日、母の誘いで母の勤める病院の院内学級のお手伝いに行くことがありました。院内学級は、何らかの病気で学校に通うことができない子

てくれてもいいのに。」という思いもありました。

帰りの車の中で、母に今日のことを話すと、

「そう……。彩香はそういう考え方をしていたの……。」

と言いかけて、母は話すのをやめてしまいました。私は、母がてっきり私の気持ちを受け止めて、私を「誉める言葉」や「励ましてくれる言葉」を返してくれるものとばかり思っていたので、心にもやもやしたものが残りました。

そんなことがあったその週の土曜日のことです。その日は、ボランティア委員会の活動で、地域の特別養護老人ホームへ介護のお手伝いに行きました。自主的に参加した私は、この日もやる気満々で、（体の不自由な高齢者の方々に一生懸命介護をしよう！）と心に決めていました。しかし、実際に介護が始まると、私は今までにない違和感をおぼえました。私が一生懸命に食事の世話をしても、相手が無表情なのです。なんだか、少し怖いような気持ちと、私の行為を相手は受け止めていないのかな、という気持ちが入り交じりさびしい気持ちになりました。

その時、私にとって衝撃的なできごとが起きました。私が食事の世話をしていた方のおばあさんは、震える手で何とか自分で食事をとっていたのですが、スプーンを落としてしまったのです。それにすぐ気付いた私は、スプーンを拾ってあげようと思いました。しかし、おばあさんは私の肩をギュッと強く握り、鋭い眼光で、（自分でやる！）と強く訴えてきたのです。私は、どきっとして、思わず動けなくなっていました。

私は今まで、（困っている人がいたら手を差し伸べる。）これが「優

どもたちが、病院内で勉強する教室です。ちょうど、体育祭の振替で学校が休みだったので、母が「友だちになって。」とお手伝いに誘ってくれました。院内学級には一人の中学生と四人の小学生、計五人が在籍していました。当たり前のように普通に学校に通っている私にとって、大変ショックでした。そういう学級があること自体全く知らなかった……。教室に入った瞬間、とても明るい雰囲気には驚きました。そしてみんな気さくに私に話しかけてきてくれたのですぐに仲良しになりました。しかし、小学四年生の拓也君だけはその輪の中に入ってはきませんでした。（はーん。母が私に「友だちになって。」というのは、この拓也君のことだな。）と気付くのにそう時間はかかりませんでした。私は、思いついて拓也君の所に歩みより声をかけました。

「こんにちは！」

小さな声で、拓也君から

「こんにちは。」

と返事がありました。しかし、声をかけたものの、中学生の私と小学四年生の男の子の拓也君ではなかなか話が合いません。

私が頑張って話題を振っても、首を縦に振るか、

横に振る程度、気まずい空気の中、時間が経っていききました。表面上は笑顔を振りまきながらも、全身くたくたになりました。（私がこんなに拓也君のためにやってあげているのに、少しはこっちの気持ちを分かっ



しさ」だと信じていました。ところが、ここではその優しさが通用しないのです。介護をしても、相手は無表情だったり、強く拒否されたり、少し怖いとさえ感じて自分に自信がなくなりました。家に帰ってもそのことばかり考えていました。食事もとらない私を見かねたのか、母は、優しい口調で語りかけました。

「どうしたの？彩香。」

私は安心したのか、自分の考えが通用しなかったやるせなさどさびしさに、あふれ出る涙をふきながら、今日あった出来事や今の自分の気持ちを正直に話しました。終始優しい表情で聞いていた母は、

「今なら分かるかな？」

と前置きをして、

「彩香は、人のために尽くすときに、その人のために『してあげている』という気持ちと『したい』という気持ちのどちらなの？」

と聞いてきました。

（してあげている……。したい……。どっちだったのだろう……。）母の言葉を繰り返しながら、私はこれまでの自分を振り返っていました。そして、私の心が、徐々に晴れていくのが分かりました。そして、（本当の優しさって何だろう？）と穏やかな気持ちで考え始めました。

